

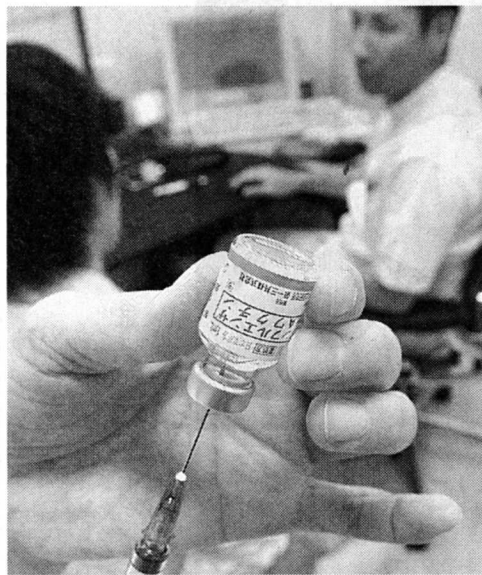
季節性インフルエンザのワクチンが不足し、医療現場に混乱が起きています。すでに来年1月の接種分まで予約で埋まり、受け付けを断らざるを得ない医療機関も。同じ人が重複して予約を入れるケースもあり、様相はさながら「ワクチン争奪戦」だ。背景には政府が新型インフル用に季節性用ワクチンの製造を減らしたことがあるが、医療従事者からは冷静な対応を求める声も出ている。

「連日、予約の問い合わせが20、30件あるが、すべて断っている。事務がパンク状態で仕事にならない」と困惑するのは名古屋市中区で小児科クリニックを営む男性医師(53)だ。

10月1日に季節性インフルのワクチン予約の受け付けを始めると申し込みが殺到。同月15日には用意した来年1月末まで

「季節性」ワクチン不足

新型インフル用製造 優先



季節性インフルエンザワクチンの不足が深刻化している(名古屋市内の医療機関)

接種予約殺到 「パンク状態」

の分がすべて埋まってしまった。業者からは「今年は例年の7割程度しかワクチンが卸せない」という連絡があったといい、「あの程度は覚悟していたが、こんな事態は初めて。ほかの医院とはしごいて電話をする患者が多いようだ」と話す。

厚生労働省は今シーズンの新型インフル用のワクチン製造のため、季節性用ワクチンを例年より2割ほど減らした。そこへ関心の高まりから季節性にも備えたい人が増えたことが重なって、ワクチン不足を招いているとみられる。

医療関連の調査などを手掛けるキューライフ(東京・世田谷)が全国の医療機関を対象に10月下旬に実施した緊急アンケートでは、57%が「季節性の希望者が増えていて」、86%が「需要を満

たす量を確保できない」と回答。「必要量の半分以下しか確保できない」も17%あった。複数の医療機関に重複して申し込む「ダブルブッキング」も発生している。

横浜市でクリニックを営む田中昌明医師(54)は「予約当日に来院しないので連絡すると『ほかの病院で打ちました』。少しでも早く打ちたい人が多いので、予約をキャンセルする人が増えている。現場の混乱に拍車をかけているのではないかと冷静な対応を呼びかけている。

国内製造量には限界

季節性インフルエンザのワクチンは国内の4つのメーカーが製造している。新型用と同様、重症化を防ぐ効果が期待されるが、感染を完全に防ぐわけではない。インフルエンザウイルスは変異するため、厚生労働省が世界保健機関(WHO)のデータなどから翌シーズンに流行しそうな種類を予測。各メーカーはこれに基づいて

ワクチンを製造する。予想外のウイルスが流行すれば、効果が期待できないこともある。2008年度の製造量は2696万本。このうち2451万本が接種された。国内の製造量には限界があり、今年度は新型用も製造する必要があったため、季節性は前年度比約8割の2252万本にとどまった。